

「いっしょにしよう！」

— 三学期の保育の視点②④より —

A ちゃんは、砂場でバケツに水と土を入れて遊ぶのが好きで、毎日砂場へでかけていきます。私が近くに行くと「チョコレートつくってるんだ」と笑顔で教えてくれます。「まあ、おいしそう」という私に A ちゃんは茶色くなったお水をシャベルで小さなカップにうつして「どうぞー」とくれます。それを受け取り飲む真似をしながら「ありがとう。甘くておいしいわ」と伝えます。私と A ちゃんは、このやり取りを何度も楽しめます。そうしながら A ちゃんは、砂場にいる他の子どもたちの様子をじっと見つめます。私はその様子から、これまで一人で遊ぶことの多かった A ちゃんに砂場の遊びを繰り返すことも楽しいけれど、友だちと遊びたいという気持ちがふくらんでいることを感じていました。

この日、A ちゃんは一時間ほど砂場でチョコ作りをした後、鉄棒の前に埋めてある半円のタイヤの遊具の方に小走りで 行きました。それからしばらく一人でタイヤをとび越えて遊んでいました。

その頃、お部屋から B ちゃんが出てきました。B ちゃんはよくお家ごっこを 2、3 人の子どもとしていますが、この日は朝から一人でソファに座り、庭の様子を眺めていました。B ちゃんは庭に出るとシーソーに腰掛け、そばで遊んでいる A ちゃんに気がつき、A ちゃんの横に行きました。私は遠くからその様子を見ていました。しばらくすると B ちゃんは A ちゃんに向かってタイヤをとび始めました。向かい合うと B ちゃんは「じゃんけんいっしょにしよう！」と言いました。A ちゃんは「いいよ」と応え嬉しそうにじゃんけんをしました。私は近くに行き、二人に「お名前知ってる？」とききました。首を傾げる二人に、「こちら A ちゃん。こちら B ちゃん。二人で一緒にすると楽しいわね。」と紹介しました。二人はにこっと微笑み合いどちらからともなく芝生の周りをぐるぐる回り始めました。タイヤの所でやっていた続きだったのでしょう。二人で反対周りをして、出会うと「きゃー」と大きな声を出し、後ろに振り向いて走り出します。芝生の反対側でまた出会うと「きゃー」とまた後ろ向きに走り出します。その後も繰り返し喜んで走り続けていました。

子どもたちの中には、今まで一人で楽しんでいた子ども、決まった友だちといった子どもも多くいます。その子どもたちの心の中に、今まで遊んでいなかった「～ちゃんとあそんでみたい」という思いがあたたまってきています。その思いに寄り添い、気持ちを言葉にする支えをしています。

「おにぎりの中な一んだ？」

お家の方の愛情が安心して過ごす基盤になっています

私は幼稚園の子どもの母としてこの数年間お弁当を作ってきました。そのことを通して感じてきたことを書きます。まず我が家のことですが、我が家では子どもからよくお弁当への注文が来ます。お友だちのお弁当がきっかけになることもあります。「明日はサンドイッチにしてね！くるくる巻いたのだよ」と夜になっていわれ、「パンがないから明日はおにぎりで、、、」と子どもの願いに添えない事ももちろんあります。時によってブームがあり「卵と唐揚げとブロッコリー」もしくは「トマトと枝豆とソーセージ」のメニューがローテーションのように続く事もあります。「おにぎりに顔つけて」と言われ、はさみでのりを切ってみたらカクカクした四角い目になってしまい、、、それでも、子どもは喜んでくれました。息子は、持っていくお弁当の中身は全く見ずに出かけ、帰ってきてから「今日のおにぎりおいしかったよー」と言っていました。娘は、朝から自分のお弁当に何が入っているのかを「見せて！」と必ずチェックしてからリュックにしまいます。食べた後のコメントはあまり聞いた事はありません。全く違う二人ですが、でも二人がお弁当を楽しみにしてくれているのはとても伝わってきました。贅沢な注文があるわけではなく、手のかかる物もなかったのも、出来る限り「願いをかなえてあげたい」と思ってきました。息子は三年生になりますが、遠足のお弁当があると今だにとっても喜びます。

ある日のお弁当の時間の風景です。Cちゃんが「このおにぎりの中、な一んだ？」と同じテーブルで食べている子どもたちに質問しました。「うめぼし！」「こんぶ！」と答える子どももいれば、質問には答えず、自分も質問を始める子どももいます。そこでCちゃんは一歩おにぎりをかじり「ママと一緒に買い物したこんぶでしたー！」とチラッと黒く見えるこんぶをみんなに見せます。

このようなやり取りにスイッチを押されたように、沢山の子どもたちが口々に『ママがどんな風に作ってくれたか』『寝ている間に作ってくれていた』『ランチョンマットに好きな絵をつけてくれた』など話し、にぎやかな楽しい時間です。子どもたちは、全部食べ終わると嬉しそうに空っぽのお弁当箱を持って「ごちそうさま〜」と出しにきます。「おいしかったでしょう。ごちそうさまでした」と私は応えます。日によっては食べきれずちょっと困った表情で「食べられない」ということもあります。そんな時私は、おなかがいっぱいになってしまったのか、ちょっと好きじゃないものだったから食べたくないのか、みんなが終わり始めて遊びたくなってしまったのか、、、聞く事にしています。その答えによっては「もうちょっと食べましょう」と促すこともあります、「わかったわ。今日はごちそうさまね」と受け止める

ことをします。すると「ママに言っておいてね」等とホッとした表情をします。

毎朝の忙しい中で、それでも『子どもが喜ぶだろう』と思いながらお弁当を作ってくれているお家の方の事を、子どもたちはちゃんと感じています。私は、子どもたちにとって、お弁当という形で作り手の（主にお母さまでしようが、、、）愛情を持



ってきている事はとても大きな支えだと思います。（お弁当だけに限りませんが）幼少期にその経験をもった子どもたちは本当に幸せだと思います。たとえ成長過程で途中忘れてしまうことがあったとしても、大きくなった時に、家族が愛情たっぷりに手間ひまをかけてくれた事は、大切な宝物になって心の奥底に残ると信じています。

（中川 光子）